

海外の日本語教育専門家の知見に基づく CLD(Culturally and Linguistically Diverse) 児のためのイベント開催

松崎かおり（南山大学）

1. 活動目的と内容

本プログラムは、日本語を学習する人たちの母語支援を考え、移動する人々ための言語教育を考えることを目的としています。筆者は言語と文化が多様な環境で育った CLD(Culturally and Linguistically Diverse)児であることもあり、幼い頃から日本語教育や複数言語使用に関心を持っていました。大学では日本語・英語以外の言語を学びたい思いからフランス学科で主にフランスの言語および文化を専攻していましたが、学科科目以外にも岩崎典子教授の「第二言語習得研究」という授業をはじめ、日本語教育、日本語学についても学びました。日本語教育分野で、これまでの自分の経験と学びを生かすことができると考えました。グローバルな視点での日本語教育に関して学ぶため、そしてこの分野の研究者や実践者とのつながりを築き、世界各国の日本語教育の発展に貢献するために応募しました。今回の研究では CLD 児を対象としたイベントの開催と、世界各地で日本語教育に関わっていらっしゃる先生方4名にインタビューを実施し、CLD 児の抱える諸問題を理解した上で望ましい支援について考えました。

2. CLDフェスティバル2021の開催

2021年11月20日に、金沢大学の松田真希子教授と、松田教授主宰の CLD-online⁽¹⁾の方々、そしてヨーロッパ日本語教師会 SIG「ヨーロッパ継承日本語ネットワーク」の方々にご協力いただき、日本語を1つの資源としてもつ全国の子どもたちとオンラインで交流できるイベント「CLD フェスティバル 2021」を開催しました。イベントはオンライン会議システムを使用し、全てオンライン上で実施しました。ポスターや

案内、申し込みフォームは筆者が日本語、英語、ポルトガル語の3か国語で作成しました。



図1 イベントポスター(日本語)

2-1 イベント概要

このイベントは日本語を共通語として国を越えた交流を目的としています。当日は日本をはじめとして、ヨーロッパ、南米、アジアなどから12の国と地域から50名程度参加しました。

プログラム program		全てzoomで開催します <English>	
23:00	23:10	オープニング、挨拶	• opening
23:10	23:30	漫才コンテスト	• Manzai competition
23:30	23:50	学校紹介・見せたいこと	• school introduction/ what I want to show everyone
23:50	24:30	ブレイクアウトで交流	• talk with everyone (BOP)
24:30	24:50	漫才コンテスト・結果発表、 フランポネさん漫才	• Manzai competition Results Announcement
24:50	25:00	クロージング	• Manzai by FrnanPonais • closing

図2 イベントプログラム

2-2 漫才コンテスト

このイベントには、吉本興業の国際夫婦漫才師のフランポネさん、スペイン語大好き芸人の藤田ゆみさんをご招待し、多言語漫才コンテストを実施しました。フランポネさんによる多言語漫才の指導映像をもとに、参加者が事前に各自で撮影することを条件に、以下4つのいずれかの方法による漫才を募集しました。共通語は日本語としました。

- ①日本語だけで漫才をする。
- ②同じ内容の漫才を日本語と自分の国の言葉を使って2回する。
- ③色々なことばを混ぜて1つの漫才をする。
- ④自分の国のことばだけで漫才をする（日本語字幕を付ける）。



図3 フランポネさん、藤田ゆみさんのご紹介

今回は日本語と英語、ポルトガル語、インドネシア語を使用した作品が合計5つ集まりました。

2-3 学校紹介・見せたいこと

参加者が所属している学校の紹介や、その他参加する方々に披露したいことなど、自由な発表の場を設けました。そこには、将来の夢を語ったり、歌を披露したり、友人と他己紹介をしたりするなど、個性あふれる6つの作品が集まりました。

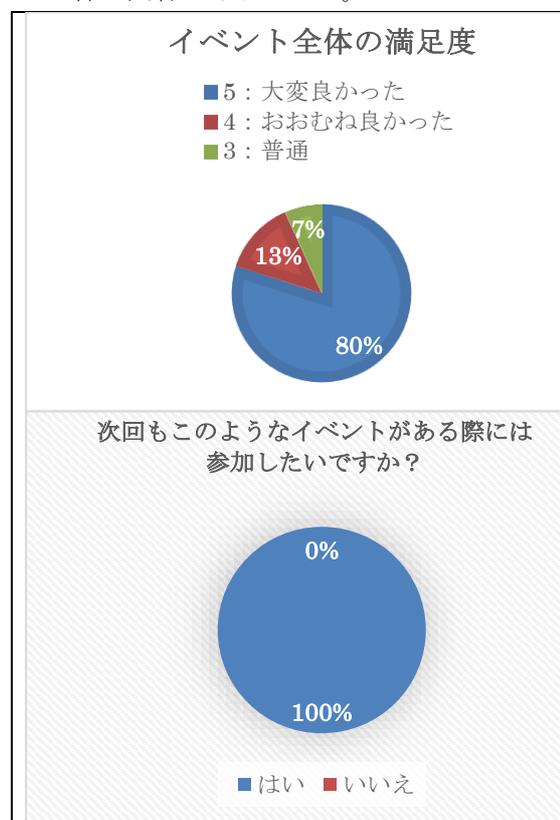
2-4 活動意義

幼児から大人までの幅広い年代の色々な背景をもって生活する人たちが集まり、交流する時間となりました。作品鑑賞時には作品に対する温かいコメントが多く流れました。国や地域の移動の有無に限らず、様々な背景をもつ人がお互いを理解し、認め合う姿が見られました。

特に日本語学校で日本語を学習しているCLD児にとっては日本語を使用した発表を、多くの人に見てもらう場になりました。世界中の人からコメントをもらったことが自信につながり、その後の教室活動へのモチベーションに繋がったという意見がありました。今回のCLDフェスティバルのように、日頃学んだ日本語を見てもらう場があると、海外にいながらも続けて日本語の勉強を継続していくモチベーションにつながると言えます。

2-5 イベント後アンケート

15件の回答がありました。



・良かった点

- ・日本語と他の言語を利用した漫才が面白かった。
- ・発表者の方が楽しそうで笑顔になっているのを見て自分も幸せな気持ちになれた。様々な背景を持つ人との交流ができとても良い刺激になった。
- ・皆さんの頑張っている姿が見れて、参加した甲斐があった。
- ・プログラムの規格に縛られない内容もあったのが良かった。
- ・世界中の人とつながる素晴らしさがある。

・違う国の人と話して、文化が違ってても日本文化への関心は同じだと気づいて嬉しかった。
 ・漫才のネタを考えるのも、発表するのも、大変だと思います。素晴らしかったです。

・改善点

・交流の時間がもっと欲しい。
 ・子供同士の方が楽しかったかも。
 ・少し休み時間があれば良かった。
 ・(交流時)移動のタイミングが難しかった。
 ・ターゲットをもう少し絞り明確にすると良い。中高生と小学生を分けた方がよかった。
 ・ネット回線で楽しめることの限界がある反面、世界中の人と繋がる素晴らしさもある。

2-6 アンケート結果からの考察

参加者がお互いの個性を認め合う機会となり、全体的に満足し楽しんでいただけるイベントの運営ができたと考えられます。

このようなイベントにまた参加したいという声も多数あったため、2022年度も続けて開催をしたいと考えています。アンケート結果をふまえて、参加者の年齢別での交流の場を設定したり、交流の方法についても検討したりして、よりよいイベントを開催していきたいです。



図4 全体で撮った写真

3. インタビューの実施

2022年3月にヨーロッパとオーストラリアで日本語教育に関わる研究者および日本語教師4名にインタビューを実施しました。オンライン会議システムを使用して、1時間程度実施しました。表1のような質問を軸に話を展開しました。

表1 インタビュー項目

・複数言語文化環境で生活する子どもが直面している問題について
 ・そのような子どもたちに必要な支援について
 ・先生が日本語教育を実施している国・地域での実践例、日本の状況との違い

インタビューは全て録画か録音をし、内容を全て書き起こし分析しました。

3-1 インタビューから学んだ3つのこと

1つ目は、日本語教育は単なる言語の教育ではないということです。「言葉の教育」というよりは、言葉の教育を通じて「人」を育て、自他の文化を受け入れ他者との違いを認められる人を育てること、言語を使用してどんな活動をするのが大事であるということ学びました。

2つ目は、社会との接点をもたせる実践の重要性についてです。日本語で発表する機会を作り学校外の人に見てもらう場を用意すること、CLD児が自分の経験や考えを表現したり他の人の話を聞いたり、社会での様々なことを経験して、考えを深めることが大切であることが分かりました。

3つ目は、教師の立ち位置についてです。子どもの視点から見た活動について考えることです。教師主導で教育を進めていくのではなく、CLD児同士で学びあい、助け合う体制を構築することが大切であるという事が分かりました。また、教育者同士で定期的実践や学びを共有することが重要であると分かりました。

また、CLD児の教育に関わる教育者の心構えとして、一人ひとりと向き合って対話をする事、CLD児が自ら言語使用することを信じて待つ姿勢が大事であると学びました。CLD児は、ときに集団のなかで異質なものとして扱われることがあります。日本でも、「ハーフ」「ダブル」というと日本人ではない別のカテゴリーの人をさしてしまうと感じます。言語や文化を大事にすることも大事ですが、一人の人間としてしっかり見て育て、CLD児を問題児扱いしない視点が重要であると思いました。

4. インタビューの成果と今後の課題

今回のインタビューを通じて、主にヨーロッパとオーストラリアの日本語教育に関して学ぶことができました。「日本語」と一言に言っても日本では主に第二言語として、ヨーロッパやオーストラリアでは継承語として位置付けられていたり、国・地域によって大きく事情が異なります。それに伴って言語の学び方や使用方法も異なり、指導方法も変化します。日本での日本語教育と世界での日本語教育は異なる部分も多いですが、複数の言語を習得するという観点では類似している部分があると考えました。今回の調査ではこのことに関する考察まではいたりませんが、今回調査した国・地域以外についても調べる必要があると感じます。今後も続けてインタビューや現場での活動を通じて知見を広げていきたいです。

5. 最後に

今回のプログラムを通じて、CLD児の言語だけではなく、言語を含めた教育全体を見る重要性について学びました。言語活動を通じて自他の文化を受け入れ、違いを認められる人を育てることが重要です。言語活動を通じて何を学ぶのかに注目し、社会と接点を持って学んでいく必要があることが分かりました。今後もインターネットを活用し、世界にいる日本語を学ぶ人々を繋げ、異なった環境で暮らす日本語を学ぶ人の話を聞くことができる機会を作っていきたいと考えています。

今回、無事プログラムを実施できたことに感謝します。ご支援くださった尚友倶楽部の皆様、ご指導くださった先生方、イベントに参加してくださった皆様、そしてこのような機会をくださった日本語教育学会の皆さまに心からの感謝を申し上げます。

注

(1) CLD-online <<https://www.cld-online.com/>>(2022年3月31日)